

10 歳未満の脊柱側弯症

座長：宇 野 耕 吉・播戸谷 勝 三

10 歳未満の側弯(早期発症側弯症)の治療は、VEPTR, growing rod の登場により、この 10 年大きな進歩を遂げた分野であるが、延長手術や予定外手術の多さ、合併症の多さなどから反省期に入り、手術時期を遅らす time saving の意味合いでの casting や brace が再び注目されてきている。今回のパネルディスカッションでは、10 歳未満の側弯症の保存治療 2 題および手術治療 3 題の報告がなされた。

まず、自治医大の渡邉らが、全身麻酔下での Risser Cotrel Cast の有用性につき報告した。12 例に平均 6 回 cast を行い、進行の防止ができていた。現時点では、手術にまでいたった症例はなく、time saving の効果は十分にあると考えられた。英国のオリジナルの報告に準じ、全身麻酔下での casting を行っているが、施設によっては無麻酔で良好な成績を収めているところもあり、毎回全身麻酔を行う是非について議論された。

続いて南大阪療育園の梶浦らが、新しい動的脊柱装具(dynamic spinal brace)の報告を行った。対象は 6 歳未満の脳性麻痺患者などの障害児で、全例に進行の防止が得られるとともに、drop out 例が皆無で、そのコンプライアンスの良さが強調された。ただし、側弯の進行予防効果に関しては、より長期かつより多くの症例数での検討が必要と考えられた。

手術治療では、獨協医大越谷の松本らが 21 例の dual growing rod の成績を報告した。初回矯正率 45. 1%，最終経過観察時 45%と良好な矯正が維持され、インプラント設置部の脊柱の成長も年間 0.75 cm 維持されていた。続いて鹿児島大学の山元らが保存治療 6 例、手術治療 10 例(早期固定 8 例、growing rod 2 例)の成績について報告した。growing rod の治療成績は、その導入期と比較すると安定してきているという印象を持った。福岡こども病院の柳田は、側弯と脚長差が合併する例に対する治療経験より、まず側弯の治療を開始し、脚長差の補正は側弯治療後に行うことを推奨した。総合討論では、cast や装具、手術適応とその時期に関する討論が行われた。ただ、各施設ともに症例数が少なく、結論には至らなかった。

(文責：宇野耕吉)